



豊臣秀吉画像
大阪市立美術館蔵

戦いであり、この戦いで元親は嫡男信親^{のぶちか}を失う。そのおわりは、慶長三年（一五九八）に終結した慶長の役であり、この役における蔚山^{ウルサン}の戦いが元親にとって最後の戦いとなる。なお、この間、天正十六年四月に元親は侍従に任じられた。

こうした軍事動員に対応するために、元親は領国支配体制を整備していった。土佐では、天正十五年から太閤検地の方式を導入した検地が開始され、『長宗我部地検帳』が作成された。慶長二年までには、土佐統治のために『長宗我部氏掟書』（『長宗我部元親百箇条』）が制定された。

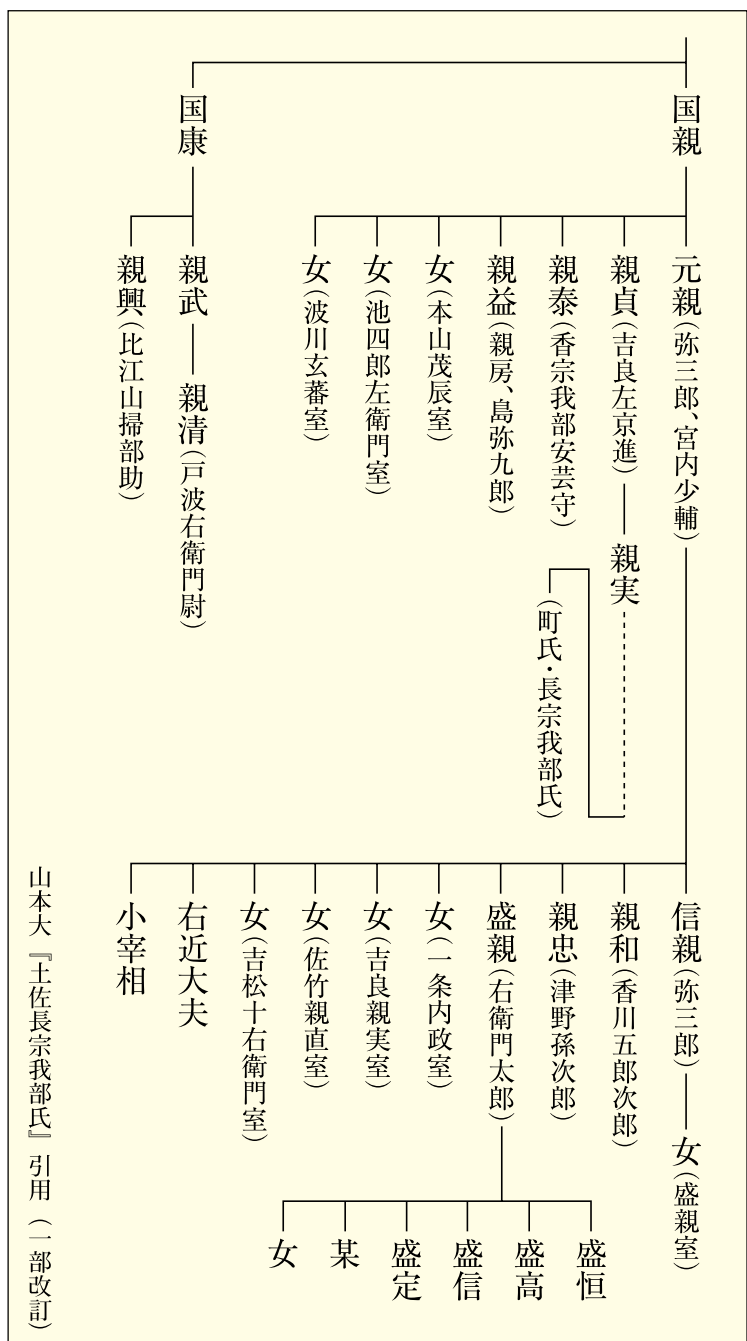
元親は慶長四年、六十一歳を一期として、伏見邸で病死した。おそらく、その永眠は信親死後に継嗣となっていた四男盛親^{もりちか}に関する一抹の不安ともなっていたと思われる。

元親の名字

長宗我部氏の先祖を秦^{しん}の始皇帝^{しこうてい}の後裔^{こうい}と称した秦河勝^{はたのかかつ}の子孫と

する伝がある。元親は秦姓を称していたので、始皇帝や河勝を祖先とする認識をもっていたのは事実であろう。姓が源平藤橘^{げんぺいとうきつ}ではなく秦であることも風変わりであるが、名字もまたすこぶる風変わりである。これも、歴史愛好家を惹きつける理由の一つではないかと思われる。その名字の漢字表記については「長宗我部」「長曾我部」の二つの表記が通用している。

長宗我部氏研究の泰斗である山本大氏がその名も『長宗我部』苗字考」と題し



* **長宗我部盛親** 一五七五（一六一五年）。元親の四男であったが、長兄信親の戦死により、家督を継承した。大坂夏の陣で豊臣方についたため、京都の六条河原で処刑された。

* **秦の始皇帝** 紀元前五九〇年。紀元前二二一年に韓・趙・魏・楚・燕・斉を滅ぼして天下を統一した。秦は中国初の統一王朝であり、中央集権的な体制をとっていた。

* **秦河勝** 生没年不詳。古代に朝鮮から渡来して山背国葛野郡（京都市）を本拠とした秦氏の族長的な人物で、推古朝の聖徳太子に近侍した。名は「川勝」と書くこともある。

た論文で「全国的には一般に『曾』の字が書かれているようである」と述べており、かつては「長曾我部」の方が一般化していたらしい。しかし、山本氏はこの論文で「長宗我部の文字を使用するよう要望したい」と訴えた。

のちに名字の読みを考える過程でも紹介してゆくことになるが、漢字表記はじつにバリエーションに富んでいる。ただし、多数確認されるのは「長宗我部」と「長曾我部」である。では、どちらが正しいのだろうか。山本氏は「元親や盛親は自身どちらの文字を書いたであろうか。管見に入つた分では彼等はすべて『宗』と書いていたのであつて、『曾』の字は見当らない」と指摘している。元親や盛親が自身で「宗」と書いたか、右筆に書かせたかはあくとして、元親らが「長宗我部」という表記をもっぱら使用していたのは事実である。いっぽうで、「長曾我部」という表記は豊臣秀吉など他者が使用していた。また、元親の名字は代々の本拠地であつた土佐国長岡郡宗部郷（南国市）の郡名と郷名にちなむとされている。「長宗我部」という表記の使用者、そして表記の由来、これらからすると、山本氏の訴えに軍配をあげるべきであろう。ゆえに、本書では「長宗我部」という表記を用いることにする。では、この「長宗我部」はどう読むべきなのであろうか。

元親の名字の読み 山本氏は先の論文で「チヨウソカベ」と読むべきと指摘した。とくに「ソ」の部分については、大東急記念文庫蔵本『和名類聚抄』で長岡郡宗部郷の「宗部」のもとに「曾加倍」と記載されていることが根拠とされている。

る。ちなみに、高山寺本では「曾加へ」と記載されている。これらからすると、指摘は妥当なように思われる。しかし、山本氏は著書『長宗我部元親』などでは「ちようそがべ」という読みを採用している。理由は不明であるが、「我」の読みを清音の「か」から濁音の「が」に変更しており、これも妥当なように思われる。ただ、いずれも「宗部」の読みとしては違和感がある。

日本では、遅くとも八世紀前半には地名の漢字表記の「二字画」が進められていた。そのなかで「宗我部」も「宗部」になったのであり、『和名類聚抄』の「曾加倍」からすると、「宗我部」の「我」の字を省略したものとみられている（蜂矢真郷「和名類聚抄地名の『部』」）。この見解をふまえるならば、「ちようそがべ」の方が妥当なように思われる。しかし、本書の主人公である元親の頃には別の読み方をしていたようなのである。

元親の名字に関する史料としてよく知られているのは、多聞院英俊が記した『多聞院日記』の天正十三年六月二十一日条の記事である。その記事の読み下し文を掲げよう（読みやすさに配慮して原文の片仮名を平仮名にあらためた部分もある）。

土佐国の大將は長曾我部という人なり、チャウスカメというと思ひし、面白き名字なり、土佐の一条殿の内一段武者なりと云々、

この読み下し文を意識してみよう。

土佐国の大將は「長曾我部」という人である。「チャウスカメ」というと思つ

* 『和名類聚抄』 成立は九三〇〜九三八年（承平年間）。醍醐天皇皇女の勤子内親王のために源順が撰した一種の漢和辞書。諸書から記事を引用し、和訓を万葉仮名で記している。

* 多聞院英俊 一五一八（一五九六年。奈良興福寺（奈良市）の多聞院の院主。大和国の豪族十市氏の一族として生まれ、一五三三年に英繁を師として出家し、長実房とも称した。

ていた。面白い名字である。土佐の一条殿のうちでもきわだった武者ということである。

まず注目されるのは、『チャウスカメ』というと思っていた」との発言である。英俊はこれまで「チャウスカメ」だと思い込んでいたのだが、そうではないことを知ったのである。英俊は奈良興福寺の僧侶であり、伝聞による京都からの情報に接する機会にも恵まれていたはずである。その京都にいた女官が記した『お湯殿の上ゆどのの日記にっき』では「ちやうすかめ」と記されている（天正十六年の正月二十日条・四月十日条・五月十二日条）。日付の異なる記事で同じ仮名表記が使用されているのであるから、書き損じなどではなく、「ちやうすかめ」と読むのだと信じられていたと考えるべきであろう。これらの記事は天正十六年のものであるが、その二年半ほど前の段階からすでに京都やその周辺では「ちやうすかめ」という読みが流布しつつあり、それを奈良の英俊も伝聞していたのであろう。しかし、右の英俊の感想が示すように、彼は正しい読みを知ったのである。

『多聞院日記』の別の記事にも「長曾我部」と記されているが（天正十三年八月二十三日条・同十四年四月十一日条）、いっぽうで「長相我部」とも記されている（天正十六年四月十七日条）。前者の「曾」は「そう」とも読むこと、後者で「相」の字が採用されていること、これらからすると、正しい読みは「ちようそうかめ」もしくは「ちようそうがめ」と想定されはしないだろうか。こうした点で注目されるのは、

慶長二年九月日付榜文ぼうぶんの写である。慶長の役で渡海諸将は連名の榜文を掲げており、この時は元親の代理として盛親が連署した。その榜文の写三通のうち二通では「長曾我部」と表記されているが、一通では「長僧我部」と表記されている（『大日本古文書島津家文書』）。この事例からすると、「宗」「曾」「相」——後述のように「曹」も確認できる——と表記される部分は「そう」と読むと判断してよいだろう。では、つづく最後の部分はどう読むのであろうか。

大名毛利氏の家臣たまきよしやす玉吉保たけの『身自鏡みがみ』には「長曾亀」と記されている。この書の成立は元和三年（一六一七）であり、盛親が大坂夏の陣で敗れて処刑された年の翌々年である。だから、この漢字表記はでたらめなものとは考えにくく、最後の部分は「かめ」もしくは「がめ」と読んでいたと判断すべきではないだろうか。ただ、やはり違和感はある。そこで、より良質の史料に依拠して、この最後の部分の読みについて考えてみたい。

『鹿苑日録ろくおんにちろく』には「長曹我妻」という表記がみられる（慶長四年九月十三日条）。記主は西笑承兌せいしょうじやうたいと親交があった相国寺の僧侶と推定されており、その承兌に関連する瞠目すべき史料が存在する。それは、文禄三年（一五九四）八月二十一日付伏見大光明寺勧進帳である（『相国寺藏西笑和尚文案自慶長二年至慶長十二年』）。勧進は豊臣秀吉が承兌のために復興した大光明寺の庫裡くら等を建築すべくおこなわれたので、秀吉家臣だけでなく承兌も勧進帳の作成に関与していたはずである。この勧進帳では

* お湯殿ゆどのの上の日記 禁中の御湯殿上の間で、天皇近侍の女官が交代で記した日記。天皇自らが執筆した部分もある。室町時代初期、江戸時代末期の記事がある。

* 榜文 「榜」は立て札。慶長の役で全羅道・慶尚道に進駐した諸将は農民支配のために両道の各地で連名

の榜文を掲げた。これらは、還住して農耕に励むことなどが命じられていた。

* 玉木吉保 一五五二〜一六三三年。毛利氏の家臣玉木（玉置）忠吉の嫡男として生まれる。元就・輝元・秀就の三代にわたって毛利氏に仕えた。自叙伝『身自鏡』は「みずからのかがみ」「みじかがみ」とも読まれている。

* 『鹿苑日録』 相国寺（京都市）の鹿苑院の院主の日記。おもな記主に景徐周麟・西笑承兌・有節瑞保などがあり、五山制度の実態を知る基本史料。一四八七〜一六五一年の記事がある。

* 西笑承兌 一五四八〜一六〇七年。臨済宗夢窓派の僧で僧録に任じられる（一五八五年に初任、一五九七年に再任）。豊臣秀吉・徳川家康のブレーンとして仏事を差配するだけでなく、外交文書も作成した。

「長宗我妻」という表記が使用されている。このように、承兌やその周辺の人々は「部」を「妻」と思い込んでいたふしがある。コラムで紹介するように、じつは勸進帳の「長宗我妻」のもとに元親は花押をすえている。元親自身も「妻」の表記を了承していたのであるから、最後の部分は「かめ」もしくは「がめ」と読まれていたと判断できる。元親の時代には「ちようそうかめ」もしくは「ちようそうがめ」と読まれていたはずである。さらに、「我」の音は「が」であり、清音から濁音への変化はよくあるが、逆の変化はあまりない。よって、「ちようそうがめ」が英俊の知った正しい読み、つまり元親の頃の読みであったと考えられる。ただし、長者を〈チヨージャ〉、軍曹を〈グンソー〉などと発音する例をふまえるならば、実際には〈チヨーソーガメ〉と発音されていたと考えるべきであろう。英俊が「面白き名字」としたためたように、元親の名字長宗我部は漢字表記だけでなく、読みもまた風変わりなのである。

「姫若子」

元親の人物像とくに青年期のそれといえ、多くの読者が「姫若子」を思い浮かべることであろう。しかし、この「姫若子」については誤解がよくみられる。まずは、「姫若子」に関する『土佐物語』の記述の原文を読者の方々に確認いただくために、掲げておくことにする（読みやすさに配慮してルビをふった）。

此元親は、生得背高く色白く、柔和にして、器量・骨柄天晴類なしと見えながら、要用の外は物いふ事なく、人に対面しても会釈もなく、日夜深窓にの

*

『土佐物語』

一七〇八年

成立の軍記物。作者の土佐藩士吉田孝世は、長宗我部氏家臣であった吉田重俊の子孫とされている。一条教房の土佐下向から山内氏の高知城築城までを記す。